

その他

東京大空襲の防空

宮城県 三 條 賢

私は北上川が海に注ぐ長面と言う農漁業の里に、

弟二人、妹四人兄妹の長男として大正十二（一九二三）年四月一日に生を享けました。祖父、父母のいる大家族の中で、祖父は金融業を営んでおり、借金の返済ができない方から物納された田圃や山林が多くなり、地方では裕福な資産家として、何不自由ない家庭で成長しました。

尋常高等小学校を卒業すると同時に、当時は軍人育成の色が濃くなっていた青年学校に、家業に従事する傍ら否応なしに入校しました。青年学校

では軍隊経験豊富な元軍人の指導下で四年の課程を卒業し、昭和十八（一九四三）年八月の徴兵検査では覚悟していた通りの第一乙種合格と宣告がありました。そして、昭和十九年一月十五日、入隊の令状がきました。

入営兵を送る壮行会が学校の校庭において行われましたが、当時余り戦況が良くないので大々的ではないが村長さんや村の有志、部落の方々の参加の下で村長さんより激励の挨拶を頂きました。私たち二人は、元気で皇国のために尽くして参りますと答礼を行い、引率者に付き添われて石巻駅を目指しました。

そして東京市葛飾区にあった晴第一九〇一部隊航空隊に入隊、陛下の御馬前ともいうべき宮城前

で敵機を撃滅する名誉ある任務に就かせられたのです。

入隊したころは冬の時季で毎日の学科や訓練の教育は厳しいものでした。また内務班においても古年兵殿より日々の厳しいビンタが飛び交う毎日でしたが、自分は青年学校で四年間の軍事教育を受けていましたので少しは余裕がありました。

食事等については家では食べたこともない肉食が一日一回は出ましたのもったいないような気がしましたが、都会から入隊した者たちの中には、こんなまずい物食べられないと不平を言う者もありました。そのとき自分が感じたことは、都会生活と我々田舎の生活は大分差があるものだと思うたことでした。検閲も無事に終了し、各分隊に配属となり、自分は第六分隊の四番砲士（大砲の上下）の任に当てられ、これは重大な責任を負わされたものと身の引き締る思いでした。四月に敵B29が東京湾方面から偵察に侵入したとの情報が入り、初めての戦闘態勢に入ったのです。

当時、敵機は成層圏を飛行、これに対し我が方の高射砲では七千メートルの高度にしか達しない状況では何ともできませんでした。敵機は夜間にも侵入してくることも多くなりました。

忘れもしない昭和十九年十一月二十四日夜、B29の大編隊が東京上空に侵入し、爆弾を投下し、都内が大火災に見舞われました。続いて同年十二月三日午後、再びB29の大編隊が大森方向から高度千メートルぐらいの低空侵入しての大爆撃で、我が隊の高射砲陣地の直ぐ近くに二百五十キロ爆弾が投下されて炸裂、我が方はなす術もなく大損害を受けました。

戦況は日増しに悪化し、我が中隊は昭和二十年二月、仙台市長町の鉄道機関区を守るため移転することとなりました。自分は命により茨城県銚田飛行場の九九式軽爆基地の電波兵器（夕号器）小隊に転属となりました。

ここでの任務は、敵機の状況をレーダーにて捕捉しその情報を大本営に送信する重要な業務を命

ぜられておりました。しかし同二十年七月に入つて我が隊が発信する電波は敵機に捕らえられ、それが逆に敵機を我が飛行場に誘導したこととなり、艦載機のグラマンやロッキードの大編隊、二百五十機ぐらいの襲来を受けました。このため飛行場は全滅となったのですが、この大火災の消火で九死に一生を得るような決死の動きが評価されたのか報奨として外泊を許可されました。

八月十五日早朝に部隊を出発、常磐線にて帰郷の途中、勝田駅で陛下の玉音放送が流されていたので、それで終戦を知ったのです。それでそのまま家で一泊したのですが、どうしたらよいものか思案しつつ一応東京の原隊に帰りました。その後仙台にて正式な復員の命令が伝達されました。

心配しながら家族の待つ故郷に帰りました。戦後は大変で食糧もなく世情は混沌とする中で復旧に取り組み、昭和二十一年縁談の話が持ちこまれ結婚、二人の子供に恵まれ、また出稼ぎ等することもなく父より受け継いだ田畑、山林等を守つ

てさえいれば何とか生計が立ったことから妻と二人で働きづくめでした。

子供たちも長ずるに及び長男は自衛官で家を離れ、娘は縁づき、どちらも時々孫の顔を見せに來ます。日常は田畑で健康づくり第一に心掛け、過ぎしあの悪夢のような戦争の時代に二十歳代の若さで亡くなった多くの戦友たち、その方々の労苦の上に今日の我が国の繁栄がある事を決して忘れずに、また二度とあのような戦争を起すべきでないとの責任で語り継ぐのが、経験をして來た者の責任であることと痛感しながら、折に触れ話して、古い先短い毎日を暮らしております。いつでも誰でも話せば分かる人間同士です。お互いの心を尊重しながら暮らせる世の中でこれから先もあつて欲しいと祈っております。